The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	セクシュアリティに臨む哲学
Author(s)	本間, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 27-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4294
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

されたりと、なぜか“問われる”立場になってしまった。どうして子供が学校に行かないという、一点だけのことで、問う立場（指導する）―問われる（指導される）という関係になってしまうのか？

学校に行っている人の人数が今のところ圧倒的に多く、行っていない者が少数派というだけで、行かないことが異常とされてしまう。不登校は、べつに道徳的、倫理的に悪であるわけではないが、今は何となくそのように思いこまされてしまうようなところがあって、それが親子ともに、特に（大人に比べて弱い立場の）子供にプレッシャーを与え、苦しいところに追いやっている気がする。そういう見方を変えることだけでも、今の不登校の子供たちのしんどさは大きく減少すると思う。そうすれば、子供の方から「なぜ学校にいかねばならないのか？」「勉強する意味は？」とか「こうしてほしい」といえるエネルギーが出てくると思う。その後のことは、子供自身が「じゃあこれからどうする」と考えることができると思う。子供にはそれを考える力があると、私は信じている。

学校の力が強くなっているのかどうかという話については、強いとも弱いともどちらでもいえるような気がするが、ただ学校はもちろん、家庭、地域など社会生活が学校化しているとは思う。親も子供を成績（というより学校生活への適応のうまさ？）で評価する。こどもはどこにも逃げ場がない。遊びでさえも評価される。（例えば休み時間であっても、一人でポツンとしていては、“友達のいない子”と評価されてしまう。）自分でありさえすればそれだけで認めてもらえる場所が誰にでも必要なのではないだろうか？

そういう意味では、今後も、不登校や不登校のこどもそれ自体を論じるのではなく、不登校を通じて見えてくるものは何かを考えていってほしいと思う。（小池啓子）

セクシュアリティに臨む哲学
――セクシュアリティ研究会への誘惑

本間直樹

セクシュアリティ（性愛）についての言説はいたるところに蔓延している。私生活についてのお喋り、各種マスメディアにて提供される情報、そして「最新の」科学の知見まで。しかしその一方で、このような情報の洪水のなかで、セクシュアリティについて語ることの困難さはますます深刻になってきてはいまいか。セクシュアリティを語る場はどこにでもあり、どこにもない。

セクシュアリティ、それは、人前で話題にすることが憚れるようなごく私秘的な事柄でありながら、同時にすべての人たちにとって免れ得ない普遍的な問題、つまりフーコーのいう意味で、「個別かつ普遍的」な問題となっている。

もっともセクシュアリティの問題は、何もそれが純粋に「主観的な体験」として個別的であり、同時に「科学的真理」として普遍的であるわけではない。セクシュアリティの客観化はセクシュアリティを語る主体を隠れた仕方で特権化することであり、逆にセクシュアリティの主観化は語る主体を矮小化することである。

主観的なものであれ、客観的なものであれ、セクシュアリティについての“純粋な記述”はあり得ないのではないか。むしろセクシュアリティについて語ることによって、「語る主体」なるものが常に逆照射されるのであり、そこにこそセクシュアリティについての語りにくさが起因するのだ。

語られた体験の数だけのセクシュアリティがあり、そこから臨床哲学の問いは始まる。例えば、「同性愛」。私たちは「同性愛」と「異性愛」という区別をあたかも自明なものとして扱い、自分をその区別の一方に位置づけようとする。しかし私たちのひとりひとりのセクシュアリティとはこのようなカテゴリーの自明性のなかに安住し得るのだろうか。私たちの「研究会」は差し当たり、日常・非日常に溢れる様々な素材（マンガ・小説・映画）を用いて「セクシュアリティ」との付き合い方を模索する。そして出来れば、毎回この『メチエ』を通じて個々の成果を発表していきたい。（ほんまなおき　助手）